陽に輝く未来を夢見て

ヘルスワン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽に輝く未来を夢見て

【Ｎコード】

Ｎ４００５Ｄ

【作者名】

ヘルスワン

【あらすじ】

「活躍を認められた者はどんな願いも叶えられる」というバーチャル世界でのルールに認められた者が現れた。願いは「現実世界で自分の奴隷になる人間が欲しい」というものだった。その願いは叶えられることになり・・・

プロローグ：ＡＤＭＩＴＴＥＤ　ＰＥＲＳＯＮ～認められた者～

『アスナよ、このロシュ世界におけるオマエの活躍を認めよう。
ロシュ世界を開放したとき、皆にした約束を実行しようではないか！！』
創造者デモクリトスはロシュ世界の全住人に向けて高らかに宣言した。

約束とは”デモクリトスより活躍を認められた者は、どんな願いも叶えられる”という褒美だった。

これまでの3年間ロシュ世界の住人は、褒美を得たい一心で、この曖昧な内容の
’活躍’とは何かを模索し、
ある者は働き、ある者は金稼ぎ、ある者は町で困っている人を助け．．．
自分が考える’活躍’をしていた。
デモクリトスにいいように弄ばれている（もてあそばれている）ことを感じながら。。。
だが、ついにデモクリトスに認められる活躍をした者が現れた。
人々は賞賛の声を上げながらも落胆の表情を浮かべた。

デモクリトスは続けた。
『アスナよ。都市シグナスの聖堂へ来るのだ。そこでお前の願いを聞こう。』

。。。数時間後
聖堂前の広場では願いが叶えられる瞬間を一目見ようとロシュ世界

の何千何万もの住人達で
大騒ぎとなっていた。少しでも聖堂の近くへ行こうとする者達、前後左右から押され苦悶の
表情を浮かべながら怒声をはいている者達、騒ぎに乗じて楽器を鳴らし狂う者達、
人が集まる場所での金稼ぎは当たり前とばかりに幾重にも立ち並ぶ屋台や露天。
３年間の鬱憤を晴らしているようであった。

『ではアスナよ、聖堂の中へ入るがよい』デモクリトスの声が広場に響いた。

同時に大騒ぎしていた住人達の中から眩い（まばゆい）光が発っせられた。
光の中心にはアスナが立っていた。
光はアスナの周りに丸い膜を作り、まるでアスナを守っているようであった。

さきほどまでの大騒ぎから一転広場は静まり返っていた。
人々はアスナと聖堂入り口の間に道を作るように左右に分かれた。
アスナは一歩ずつゆっくりと聖堂入り口に向かった。
入り口でアスナがドアを開けようと手を伸ばしたとき、指先はドアをすっと通り抜け
そのままアスナは中に入っていった。

広場にいた人々は聖堂入り口に殺到したが、押しても引いてもドアは開かなかった。
次の瞬間ドアは跡形もなくなりただの壁となってしまった。
あきらめずに横の窓から覗こうとするもの、屋根に登って中の様子をどうにか

見ようとするものが現れたが、どの窓も入り口もただの壁となった。
それでもあきらめきれずに壁を壊そうとするものも居たが、ひび一つ入らなかった。

アスナは真っ暗な聖堂の中にいた。
自分を包んでいる光のおかげで周囲２，３ｍだけ確認でき、聖堂の中にいるという
ことだけは理解できた。
―（ドアをすり抜けたとき別空間に送られたかと思ったが聖堂の中のようだ）アスナは
何が起きても対処できるように戦闘態勢をとっていた。

『そう身構えるな。何もしないから。』デモクリトスの声が聞こえると同時に
目の前に１０代後半くらいの精悍な顔つきをした青年が立っていた。
「アスナ、お前の願いを叶えよう」青年はアスナに語りかけた。

アスナは呆気に取られていた。
これまでに聞いていたデモクリトスの声から老人を想像していた。
それがこんなに若い男だったとは。。だが、すぐに我に返り答えた。
「私の願いは、、、」

プロローグ：ＡＤＭＩＴＴＥＤ　ＰＥＲＳＯＮ～認められた者～（後書き）

＜＜あとがき＞＞

もっと描写を詳しく書きたかったのだが、だらだらと長くしたくなかったので言葉足らずの部分があることを了承いただきたい。

登場人物に関する詳細は後々明かしていく。。。。と思う。

プロローグ2：　REWARD～褒美～

聖堂前の広場でもデモクリトスとアスナの会話が聞こえていた。
どうやらデモクリトスが気を利かせて広場にいる住人達に聞こえるようにしてくれたようだ。

『アスナ、お前の願いを叶えよう』

デモクリトスの声が聞こえると、中の様子を探ろうと騒いでいた住人達は静まり返った。
次にアスナの声が聞こえた。
「私の願いは、、、」
と、言いかけたところでアスナは口を閉じ、何かを考えてデモクリトスの顔を見て言った。
「叶えられる願いは，現実世界，のことでもいいのだろうか？」

アスナの質問に対してデモクリトスは少し面食らっていたようだがこう答えた。
『ふむ、条件は何も出してなかったな。自然の摂理を破壊する願いは叶えられないが、
お前の願いを聞いて実現可能か判断しよう』

ロシュ世界は優秀な科学者・開発者が召集され作られたバーチャル世界だ。
誰が何のために作ったかは不明だったが異なる人種の言葉でも会話できる世界というのが売りだった。
また、ロシュ世界が報じられたとき
［ロシュ世界で何かを遂げればどんな願いも叶えられる］
という副題がついており、人々は半信半疑ながら世界に入っていた。

。。

「では願いを言おう」アスナは続けた。

「私の奴隷になる人間が欲しい。叶えられるだろうか」

デモクリトスはククっと笑いながら言った。

『わかった。願いを叶えてやろう。現実世界の人間だな』

『ただし、その願いを叶えるには少々時間がかかる。1年以内・・・すくなくとも半年必要だ。いいか？』

「わかった」

アスナは即決した。

聖堂前広場では歓声と、そんな願い事が？という驚きの声で渦巻いていた。

プロローグ２：　ＲＥＷＡＲＤ～褒美～（後書き）

＞＞あとがき＜＜

現実世界って言葉使いたくなかったけど他に浮かばなかった。。。

ｏｒｚ

もっといい言葉ないのかなぁ。「リアルワールド」だとピンと来ないし、、、別の異次元世界にするのは話が混乱するし。

難しいですね。

第1話：　ＡＢＤＵＣＴＩＯＮ～拉致～

。。。。ロシュ世界での騒ぎから3ヵ月後の現実世界

「ほら起きろ、カズラ」
少女はベッドで寝ている少年を足蹴にしながら怒鳴った。
乱暴に起こされた少年は目をこすりながらベッドから起き上がると
枕元に置いてある時計を見ながら言った。
「姉ちゃん、蹴って起こすなよ。しかもまだガッコ行くには早ぇよ」
「馬鹿！！その時計が壊れてるのよ。目覚まし鳴らなかったでしょ」
「え！？今何時？」
「もうすぐ8時。じゃ私は学校行くから。」
「な、なんだってーー。」
カズラはドタバタと慌ててベッドから這い出すと制服に着替えようとした。
「もうちょっと早く起こせよな、馬鹿姉貴」
太ももに激痛が走った。またもや姉から蹴りを喰らっていた。
カズラはそのままうずくまり目に涙を溜めていた。
姉はドスドスと足音を響かせそのまま玄関に向かうと
「いってきまーす」と出て行った。
「相変わらずあんたらは朝からバカやってるねぇ」
振り向くとそこには母がいた。
「いっつも俺が蹴られて鬱憤晴らされるんだ。あの馬鹿姉貴」
「あんたが余計なこと言わなきゃそんな目に合わないんだ。それに・・・
まぁいいわ、さっさと学校行きな。私も仕事行く時間だわ」
「分かった分かったよ。」
「すぐ蹴りやがってアイツ。」

カズラはブツブツ独り言を言いながら足をさすり不恰好な歩き方で学校に向かっていた。
角を曲がり、あと5分くらい歩いたら学校だなと考えていた次の瞬間、
背中に激痛が走り衝撃からうずくまった。
（なんだ！？姉貴にまた蹴られたのか？いやいやいや、そんなわけあるか！）

うずくまってすぐに両手を後ろに回され縛られていた。
相手の顔を見ようと顔を上げたとたん目隠しまでされてしまった。
カズラは何が起こったのか分からずパニックになっていた。
「痛ぇ～、なんだなんだなんだ？誰だ？」
叫んだが誰も何も言わない。そして口の中に何か布のようなものを押し込まれ声を出せなくなってしまった。

車が近づく音がし、ドアが開く音がして中に押し込まれた。
足をバタつかせたが、腹をこづかれ一瞬動けなくなったところで足を縛られた。
何もできないと悟ったカズラは恐怖に震えた。体を持ち上げられシートに座らされた。
「心配するな。おとなしく従っていれば殺しはしない。」
男の声にビクッとしながらカズラは顔を上下に激しく動かし頷いた。
バンッバンッ！！と何かを叩くような音がすると車はゆっくりと動き出し走り去っていった。

途中何度か車を乗り換えながら何時間も走ったところで車は止まり
「降りるぞ」
男に言われるまま車を降ろされた。
また乗り換えるのかと考えていたが
「歩け」

足に縛られていた紐が外されたが後ろ手に縛られたまま両脇をガッチリ固められ、カズラは引っ張られるように歩いた。
砂利が敷いてある地面を歩いているのか、数人の足音が聞こえた。
殺されるのだろうか、監禁されて何かされるのだろうか、どうやったら逃げ出せるだろうか・・・
車に乗っている間も色々考えたがいいアイディアなんか浮かぶはずもなく黙って震えながら従っていた。

しばらくして立ち止まり、前方で何かを叩いている音がした。
「どちら様でしょうか」老人の声が聞こえた。
「先ほど連絡いたしましたロシュ世界からの使いの者です。」
「はい、少々お待ちください」

カズラは助けてもらおうと声にならない声を（ん～、ん～っと）出して訴えていたが
聞こえてはいないようだった。
（どこに連れてこられたんだ？ロシュ世界ってどこかで聞いたことがあるような・・・なんだったかな？）
冷静に考えようと努めていたが、自分が何をされるのか分からない恐怖が支配していてうまく頭の整理ができなかった。

「ハイハイハイハイ、お待ちしてました」今度は若い女性の声が聞こえてきた。
扉を開ける音がして「・・・・その子？」と聞いている。
「はい」男はそれだけを答えた。
「ふ～ん・・・ＯＫ、中にどうぞ」
どうやら、この女性の家のようだ。カズラはまた引っ張られるように歩いた。
何ｍか歩いたところで「座れ！」男に両肩を強く突かれ、後ろに倒

れそうになりながら椅子に座らされた。

第1話：　ＡＢＤＵＣＴＩＯＮ～拉致～（後書き）

＞＞あとがき＜＜

やっと第1話に辿り着きました。

第2話：　ENCOUNTERED　ASUNA～アスナとの出会い～

「考えていたより随分と早かったわね」女性が男と話しているようだ。
「はい、手ごろな者が見つかりましたので連れてまいりました」
「ちょっと顔を見せてくれないかしら」
「わかりました」
カズラに近づく足音が聞こえ耳元で男がこう言った
「いいか騒ぐなよ。もし騒いだら命がないと思え。いいな？」
カズラは頷くしかなかった。
ゆっくりと目隠しが外され、口の中に詰め込まれた布も取られた。
わざと咳き込みながら見回すと男が三人周りを囲んでいた。三人ともサングラスをして長い髭を蓄えていた。
髭に違和感があるため、付け髭をしているようだ。
部屋はけっこう広く、大きなピカピカのテーブルや椅子が置いてあった。大きな窓にはカーテンがかけてあり、外からの光は入らないようになっているようだ。
前を見るとテーブルをはさんで女性がソファーに座っていた。横には老人が立っていた。
２０代前半くらいだろうか綺麗な女性で、カズラをじっと見つめていた。
カズラは思わず叫んでいた
「助けてくれ！！」
すかさずカズラの横に立っていた男に頬を叩かれた。
「騒ぐなと言ったはずだ！」男は叫んだ。
カズラは体がガタガタと震えているのを隠そうと歯をくいしばりうつむいた。
「１０代後半くらいかしら？ちょっと資料を見せてちょうだい」
女性はテーブルの上に置いてある４，５枚の紙を手に取り、ペラペ

ラとめくりながら言った。
「へぇ～こんな子がいるんだ」
「アスナ様ご満足いただけましたでしょうか？」
男は女性に振り向き訊ねた。
「えぇ気に入ったわ。健康そうだし、これなら使い物になりそう。で、この子・・・カズラ君のご家族や周囲の同意は取れてるの？
本人は何故ここに来たのかまるっきりわかってないみたいだけど？」
「はい、家族の同意は取れています。周囲には家族がうまく取り成すように契約しておりますのでご心配なく。
アスナ様がどうされるのかを我々もうかがっていませんので、まだ本人には説明をしておりません。」
「どういうこと？私から彼に説明するわけ？冗談じゃないわよ」
驚いた顔でアスナは男を睨みながら言った。
「お嬢様」
アスナの横に立っていた老人が静かに諭すようにアスナに語り掛けた。
「私はこんなこと今でもあまり良いとは思いませんが、事がここまで運ばれてしまっては仕方がありません。
それにお嬢様も何をされるか、お話されていないご様子。それではあの方々も説明のしようがないのではありませんか。」
「分かったわよ。説明するからあなた達も補足して。」男達に向かってアスナはぶっきらぼうに言った。

カズラは混乱していた。これは人身売買なのか？それに家族が同意したってどういうことだ？普通に生活してて学校行ってるだけだぞ。母さんも姉ちゃんも何も言わなかったじゃないか。今朝も何も変わったとこなかったぞ。
「カズラ君、ロシュ世界って知ってる？」

カズラはどこかで聞いたことがあると感じながらも首を横に振った。
「ちょっとそれぐらいは説明しておいてよ」アスナは男達を睨んだ。
「では、我々が説明しよう」
男はロシュ世界のことについて話はじめた。
ロシュ世界はバーチャルな世界で現実の世界とは異なること、
現実の全世界と繋がっていること、
そこへ行くためには専用の機械が必要なこと、
体が飛ばされるわけではなくロシュ世界に作られた体に精神が乗り移ること、
中には数十万の人があたかもそこに住んでいるかのように暮らしていること、
創造主デモクリトスという者が支配していること、
そして最後に「デモクリトスに活躍を認められたものには何でも願いが叶うという褒美があること」、
それらが簡略に語られた。

ここまで聞いてカズラは何年か前に新聞やテレビでロシュ世界が報道されていたことを思い出した。
色んな解説者、研究者達が何が目的なのか、何をするのか、現実世界への影響など論争を繰り広げていた。
その頃は関心がなかったというのもあるが、いつのまにかその話題は風化しそういった世界があることをすっかり忘れていた。
「それでそのロシュ世界と俺と何の関係がある。ロシュ世界なんて行ったこともないし周りにも行ってるやつなんて居ないぞ」
「そう、それ！行ったことないなんて！しかも周りにも居ないなんて！」アスナがすかさず答えた。
「なんでも願いが叶うって発表当時大騒ぎだったのよ。ロシュ世界に行く機械も最初は品薄だったけど、世界中にスポンサーがついてから
タダ同然でばら撒かれたのに。まぁ活躍を認められるってのが何

のことだかわからなくて途中で投げ出す人や、ちょっと世界に入って見てみるだけって人も大勢いて、最近は下火になってたのは確かだけどね」

「そういえば何ヶ月か前に活躍を認められた人がいたって聞いたような。。。学校でもちょっと話題になったけど2，3日で忘れてた」

アスナはクスッと笑って言った。

「それが私」

第3話：　TRANSMIGRATION～転生～

カズラは、アスナが認められた者と聞いてもそれがどうしたという感覚だった。
それよりも何故連れてこられたのか、何をしようとしているのかが知りたかった。
「ロシュ世界で認められたことがどうして俺に関係あるんだ？」
「それは私が願ったの。奴隷になる人間が欲しいって。そしたら君が来た」
「どういうことだ！？ロシュ世界なんて関心なかったし何の関係もないって言ってるじゃないか！！」

アスナはしばらく考えて聞いてきた。
「カズラ君、お父さんが死んだときのこと覚えてる？」
「い、いや覚えていない」
「・・・・君が殺したんでしょ？」
「え！？」
「父さんが死んだのは俺が小さいときだって・・・みんなが。。。」
アスナはカズラをまじまじと見て言った。
「資料は正確のようね。。。君、5年前のこと覚えてる？」
「当たり前だろう、5年前はちょうど留学してて・・・・
あ、あれ？俺どこに留学してたんだ？何のために留学を！？」
カズラは場所、会った人々の顔等々思い出すことができないでいた。
アスナはカズラを無視して続けた。
「資料に少しだけそのことが書かれていたわ。
5年前、君は自宅でお父さんを殺害したらしい。
何があったのか警察の捜査でもわからなかったみたい。
君はお父さんが殺された部屋で凶器を持ったまま気を失っていたらしいから警察も事情がわからなかった。

そして目を覚ましたときそのときの記憶がなくなっていて、まったく別の記憶にすり替わっていたらしいわ。
その記憶も曖昧で、質問にまともな答えができなかったらしい。
専門家はショックでそうなったんだろうと言ったらしいわ。家族はお父さんのことを教えないように隠しながら
今まで生活してきたそうなんだけど・・・・一緒に居ることに疲れたみたいね」

カズラは頭の中が真っ白になっていた。
「そんなのウソだ！！」そんな言葉しか出なかった。
「信じられないだろうけど本当みたいよ。そうでないと、こんなとこに連れてこられるわけないもの」
「君には私の奴隷になってもらうわ。正確にはちょっと違うけど」
アスナの言葉をカズラは聞いていなかった。必死で5年前のことを思い出そうとしていた。
「あれ持ってきて」
アスナが老人に命じると、老人は隣の部屋へ行き何かの機械をもってきてカズラに装着しはじめた。
「君にはロシュ世界に行ってもらうわ。その間、君の体はこのコウエンに使ってもらう」
と、老人を指差した。
「もう体中ボロボロでね。代わりの人を雇おうかと思ったけど色々と面倒だからどうしようかと悩んでいたの。
そんなときロシュ世界で認められちゃって、ダメもとで頼んだら承諾されちゃった」
「で、どうせなら君にはロシュ世界に行ってもらって、コウエンに体を貸してもらおうということにしたの」
「ちょ、ちょっと待ってください。我々はそんなこと聞いてませんよ」カズラを連れてきた男達が口を挟んだ。
「それならあなた達のずっと上の上司にでも確認してみたら？」

「わかりました。確認しますので少々お待ちください」
一人の男が早足で部屋を出て行った。
カズラは放心状態で、椅子に座ったまま機械を装着されていた。
「言わない方が良かったかな」アスナは老人に尋ねた。
「よろしいのではないでしょうか。何も知らないままというのは本人も納得しないでしょう」老人は答えた。
しばらくして男が部屋に戻ってきた。
「お待たせして申し訳ありません、確認が取れました。しかし、このカズラという男はこの世界に戻ってくる
　ことはできるのでしょうか？」
「さあ？それは本人次第じゃない？私はそんなこと知らないわ」
「し、しかし・・・」
「了解いたしました。お続けください」男は何かを言おうとして言葉を詰まらせた。
機械の装着が終わったようで老人はアスナに目配せした。
「じゃあ早速行ってもらいましょうか。もしまた会えたらロシュ世界で何したか教えてちょうだい。ばいば～い」
アスナは何かのボタンを押した。
「ちょっと待・・・」カズラはバタバタと体を動かしていたが、一瞬で眠ったように静かになった。
「次はコウエンの番ね」老人はすでに何かの機械を装着して別の椅子に座っていた。
アスナが、また別のボタンを押すと老人も眠ったようにガクッと頭を垂れた。そしてカズラの目が開き
「お嬢様」と声を発した。
「成功ね」アスナは嬉しそうにカズラの、いや今はコウエンの体に巻きつけられていた紐を解いた。
ロシュ世界からの使いの男達は一部始終を見終わってアスナに声をかけた。

「それでは我々は失礼いたします」
「はい、ご苦労様。何かあれば連絡するわ。そうそう、ロシュ世界に行った彼のことよろしくお願いしますね」
「そのことはご心配なさいませんように。ただ何らかの方法で彼が戻ってきたときのことを考えておいてください」
「そんなことあなた達に言われなくても分かってるわ」アスナは男を睨んだ。そして高らかに笑いながら言った。
「でも、あんな状態で戻って来られるのかしら」

第４話：　ＣＲＩＭＩＮＡＬ～罪人～

カズラは町の中に立っていた。なにか懐かしさを感じる雰囲気だった。
ぼーっと周りを見ていたときカズラに声をかける者がいた。
「カズラ！」
「誰だ？」
キョロキョロとあたりを見回したが町人は歩き回っているだけで自分に声をかけているような人物は見当たらない。
「ようこそ、ロシュ世界へ。私の名前はカロン。この世界に来た方々を助ける役目のものです。私の姿は誰にも見えません。
今あなたはこの世界に体を持っていません。まずはこの世界で使用する体を選ぶ必要があります。特に決まっていなければ私がランダムに選びます」
「ちょっと待て！俺はこの世界に来たくて来たわけじゃない。無理矢理連れてこられたんだ。戻してくれ！！」
「わかりました。しかし戻るには体を選択しなければいけません」
「すぐ戻るんだからなんでもいいよ！」カズラはぶっきらぼうに答えた。
「はい。では私が選びます」
光が体を覆いはじめた。まぶしくて目を閉じると浮いている感覚になり、目を開けると町の中に立っていたはずが教会の中にいた。
「どうなったんだ？」
「あなたにはプルト町に属する剣士になってもらいました。プルト町はパテル神を信仰する町です」
「わかったわかった。そんなことはどうでもいいや。現実世界に戻してくれ」
「目の前にある荷物の中にペンダントがありますので出してください」

足元を見ると袋が置いてあった。中を見ると色々と入っていたが、ペンダントを見つけ取り出した。
「首にかけてください。そしてペンダントを握り締めて戻りたいと考えてください」
カズラは言われるままペンダントを首にかけた。そしてペンダントの飾りを握り締め現実世界に戻ることを考えた。
しばらくするとまた光が体を覆い始めた。が、すぐに光は消えた。
「あれ？おかしいですね。調べますので待っててください」
「お、おい、カロン！？」
おそらくアスナが戻れないようにしているのだろうとカズラは考えていた。
「あんなウソついて俺をこんな世界に閉じ込めるなんて！」
「お待たせしました」カロンの声が聞こえた。
「やはりアスナが何か妨害してるのか？」
「は？いいえ、そういうことではありませんでした。あなたは罪人のようですね。
現実世界で罪を犯した方の精神がここに閉じ込められることが、この世界ではときどきあるんですよ。
ロシュ世界に精神がある罪人の体は刑務所で管理されるのですが、あなたの体は先ほどおっしゃっていたアスナ様が
管理されているようですね。というよりロシュ世界での願いによってそうなったと言うべきでしょうか。
そういうわけで、あなたは戻ることができません」
「そんなことあるもんか！あれはアスナが作ったウソだ。俺は父さんを殺してない！」
「あなたは罪人として登録されています。アスナ様は関係ありません。」
「そんな・・・・俺はもう戻ることはできないのか？」
「それは私から教えることができません。ご自分で見つけてください」

「見つける・・・ということは何か方法があるんだな？」
「・・・・・・」
「わかった。で、まずは何をすればいいんだ？」
「ロシュ世界は何をするのも自由な世界です。あなたが思うままに行動してください。
まずは、あなたに与えられているアイテムについて説明しておきましょう。
あなたはアスナ様への褒美の代償としてこの世界に来たということもあり、特別なアイテムを使用することができます」

第5話：　SPECIAL　ITEM～特別なアイテム～

カロンは特別なアイテムについての説明を続けた。
「このロシュ世界であなた一人しか持っていない貴重なアイテムです。他の人が持っても使えませんが、失くしたり誰かに取られたりしないようにしてください。
アスナ様の件が関係しているため、あなたのような罪人にこの貴重なアイテムが委ねられたのです。

そのアイテムとは「ハティ」と言います。ロシュ世界内のことでしたらどんな願いも叶えてくれます。
ただし、創造者デモクリトスが認められた願いだけです。また、使用するには簡単な制約があります。
使用する前に3分間踊る必要があります。踊りを他の人に見られたら願いは叶えられません。しかも、2週間使用できなくなります。
ハティ使用後も2週間使用できません。

では、ハティを呼び出してください」
「呼び出す？」
「ハイ、荷物に向かって呼びかけてください。出てきますから」
カズラは困惑しながら足元の袋に話しかけた。
「ハ、ハティ・・・」
・・・袋からは何も出てこなかった。周りをキョロキョロと見渡したが何もなかった。
「ゲッ！？久々に出てきたのにこんな野郎と組まされるのか」
頭の上から聞こえてきた。上を見たが何もいなかった。
「は～～、バカだねぇ。こんなバカと一緒かよ、デモクリトス様も何考えてるんだか」
今度は前から聞こえてきた。足元を見ると一羽のインコがいた。

「俺がハティ様だ。俺様を使うことができるなんて光栄なことなんだぞ。敬え」
威張り散らしているインコを怪訝な表情で見ていたカズラはカロンに言った。
「こんなペットいらない」

「お前バカか？バカか、あ～バカだ。バカ！」ハティは捲くし立てた。
こんなにバカバカ言われたのは何年ぶりだろうとカズラは考えていたが今朝も姉に馬鹿と言わたのを思い出した。
「ハティ！！」カロンは強い口調で言った。そして優しく諭した。
「いいですかハティ、カズラはまだロシュ世界に来たばかりなのです。だから何も知らないのです。それとカズラにも言っておきます。
ハティはあなたを助けてくれる貴重なアイテムです。ペットではありません。だから仲間と思って付き合っていってください」
「え？まだ来たばかり？なんでそんなやつと一緒に？」と言いながらハティはカズラをじっと見つめた。
「アーーッ、アスナ様が絡んでるのか！！」
「そうです。アスナ様の件でハティ、お前が一緒に行くことになったのです」
「え～、俺アスナ様と一緒に旅できると思ってたのにショックだ。なんでこんな野郎と・・・」
ハティはブツブツ言っていたが仕方がないという口調でカズラに言った。
「わかった。よろしくカズラ。しょうがないから一緒にいてやる」
「俺、こんなウルサイ奴いらない」
「ふざけるなよ、お前！！呼び出しておいていらないってどういうことだ！！」
「呼び出せって言われたから呼び出しただけだ」
ハティは口をパクパクさせて何か言おうとしていたが怒りで言葉が

出てこないようだった。
「カズラ、うるさいのは我慢して一緒にいなさい。きっと役に立つから」
「カロンまで！？」ハティはガックリとうなだれた。
「いいですね？カズラ」
「わかった」
カズラは渋々了承した。

「言い忘れていました。ハティと１０ｍ以上離れると踊ってもアイテムの効果は発揮されません。」
「え〜〜〜、そんな大事なことも言ってなかったの？もしかしていつ踊りも知らない？」
「はい、知りません」カロンは即答した。
「え〜〜〜〜〜〜〜、なんで俺呼び出されたの？」
「あなたがカズラに教えなさい」
「え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」
「・・・やっぱりこんなウルサイ奴いら」ハティは飛び上がりカズラの頭をつついた。
「さあ踊りの練習するぞ！！」
ハティは覚悟を決めてカズラにハッパをかけたが、カズラはやる気なさそうに立ち上がりハティについていった。

。。。。。。。　かなりの時間を費やした後
「よし、やっとなんとか形になったな。たった3分の踊り覚えるのにこんなにかかるなんて・・・
　お前相当物覚え悪いな」
「だってすっげぇカッコワルイし、お前が歌ってるんじゃリズムにも乗れないし」
カズラはハティを見てヘタクソな歌を思い出し笑っていた。
「お前毎回歌うのか？」

「この美声が聞きたかったら歌ってやるぞ」
「いや歌わなくていい！」
「ナンダト！！それで踊れるのか！？」
「見られるとまずいんだろう？お前の美声で人が寄ってくるとマズイからなあ」
「ふむ、そうだな」なんとか機嫌を損ねずにいてくれたようだ。
「せっかく覚えたんだ。何か願い事はあるか？」ハティはカズラに尋ねた。
「そうだな。現実世界に戻るってのはやっぱり無理なんだろう？」
「無理だ」ハティは即答した。
「じゃあ5年前に俺が父さんを殺したって言われてる事件の真相を知りたいって願いは？」
カズラは真剣な表情でハティを見て言った。

第6話：　PURPOSE～目的～

「事件の真相って、それはロシュ世界のことじゃないから無理だな」
「そうか・・・」あっさり断られた。
「俺は何も覚えていない。本当に俺が父さんを・・・殺したのか」

「ロシュ世界で叶えられることは何でも願っていいんだ。何かないのか？」
「何でもいいったって俺はロシュ世界のこと何も知らないんだ。何を願えって言うんだ」
「そういえばそうだったな。とりあえず剣士なのに剣も持ってないんじゃ格好つかないから剣でももらったらどうだ？」
「そんなもの、人を傷つけるだけで何の役にも立つもんか」
「あーん、バカだなお前。バカだ。バカ！」
（またバカ連呼だ。鬱陶しいインコ・・・）
「いいか。俺様がせっかくお前のために言ってやってるんだ。ここは黙って従っておけ」
「あーわかったわかった」
カズラはノソノソと起き上がり願い事をするための踊りを踊った。
3分間楽しくなさそうに仏頂面したまま。。
そして剣が欲しいと願った。
すると目の前に大きな剣がスーッと現れた。
「オイオイオイ、こんなでっかい剣を願ったのかよ、振れるのかこんな大剣。俺だったら片手で軽く振れるような剣を願うぞ。
　もしかして以前こんな大きな剣を使ったことでもあるのか？」
「ない」
ハティはポカーンと口を開けたまま固まっていたが我に返ると、
「バカか！やっぱりバカか。あーそうかバカだとは思っていたがここまでバカか。バカ！！」

一気に言い放った。
「バカバカ言うな！俺はただ自分を守ってくれる剣が欲しいと願っただけだ。そしたらこんな大きな剣が出てきて
　自分でもびっくりしてるんだ」
「とりあえず持って振ってみろ。守ってくれって願ったんなら守ってくれるかもな」

カズラは大剣を片手で持ち上げてみた。両手で持たないと持ち上がらないかと思っていたが案外軽く、すっと持ってた。
しかも何だか妙にしっくり来るというか手に合っているというか不思議な感覚があった。
そしていつのまにか大剣をブンブンと軽々振り回していた。自分で振っているわけではなく剣からの見えない力で振らされている感覚もあった。
ある程度振り回したところでハティを見ると驚いて目と口が開いたままカズラを見ていた。
「カ、カズラ君？聞いてもいいかな？ホントに大剣使ったことないの？
　あ～分かったなるほど。ウソついて俺をだまそうとしたってこと？」
「いや、本当に俺は大剣というか剣さえ使ったことがない。なんて言ったらいいのか剣が勝手に体を使ったというか、
　剣に振り回されたというか・・・」
「あら、剣を出したんですね。私はてっきり、たくさんのお金とか食べ物とか考えていました」
「うわっびっくりした、カロンか！！そうなんだよ、こいつバカだから剣なんて願いやがった」
「お前が剣出せって言ったんじゃないか！！ちょっと待てお金？ロシュ世界でもお金必要なのか！？食べ物も必要なのか！？」
「バカかお前。暮らしていくのにお金も食べ物も必要じゃないか。

もっとも俺様はそんなものは必要ないけどな」
カズラは大剣でこのインコをぶった切ってやろうかと考えたが願ってしまったものはしょうがないと手を止めた。
「これからどうしろって言うんだ？金も食べ物もなくてどうしろって言うんだ」
カズラは何をしたらいいか分からない自分をカロンとハティがバカにしてるんじゃないかという口調で問いただした。
「そんなの知らねぇ」ハティは我関せずの態度を取った。
「なんだとてめぇ」
「知るかよ。ここはロシュ世界だ。何をやっても自由だが自分のことは自分で責任持ってやれ。他人を頼るな」
「だから俺はロシュ世界のこと何も知らないって言ってるだろう」
「だったら何を知りたいのか何をしたいのか何をして欲しいのか考えろ」
「まあまあ落ち着いてハティそんなこと言っても無理ですよ。とりあえずこの教会から出て前の道をまっすぐ進むと
プルト町の中心地があります。そこには町の人が手伝ってほしいことが掲示されています。
それらを手助けしてお金を稼ぐしかないでしょう」
「求人案内か。仕方がない行ってみよう」
「では私はここにいます。どの町に行っても教会があれば私と話をすることができます。困ったことがあれば言ってください。
ただ町の人に聞けば分かることも多いと思いますので積極的に色々と話をして聞いてみてください」
「え？カロンはついてこないのか？」
「当たり前だ、カロンは教会の中でしか助けてくれない。後は自分で考えろ。それと剣を出したから俺は2週間願い事を聞いてやる
ことはできないからな」
「そうだったな。わかった」
「だが寂しくないように話し相手になってやる。安心しろ」

「ゲッ！？」
「ゲッってなんだ！」
「いや、インコと話してたら珍しいからってお前持ってかれたりしないだろうかと思って・・・」
「他にもペットとして飼ってる奴もいる。ペットと話ができるから珍しくはない」
「へ、へぇ～そうなんだ。じゃあ早速行ってみるか」

町の中央まで歩いているとき、剣を見ていたカズラは何かの模様が書かれていることに気づいた。
「ところでさ、この大剣に模様が書いてあるんだけどこれなんだろう？」
「なんだ？見せてみろ」カズラはハティに剣の模様を見せた。
ハティは模様を見て何か考えているようだった。
「これはレアの模様だな。だが・・・」
「なんだ？」
「レアの模様の中に何かが書かれている。俺には読めない文字だ」
「何！？」カズラは模様の中をじっと見た。
”元の世界に戻りたければハーシェルを見つけろ”

第7話：　ASUNA　AND　HATI～アスナとハティ～

「ハーシェルって誰だ！？」
カズラはハティに聞いた。
ハティはびっくりしたような顔をしていた。
「俺は知らねぇ」
「何か知ってるなら教えろ」
「知らねぇものは知らねぇ」
「いいかこの剣には”元の世界に戻りたければハーシェルを見つけろ”と書かれている」
と、ここでカズラはハティに読めない文字で書かれていることを思い出した。なぜ？
なぜわざわざハティに読めないようにしているのだろうか。ハティに聞いても無駄ということか？
まあいい、これでこの世界でやることが決まった。
「掲示ってあれじゃないか？」
ハティはハーシェルのことから逃げ出すように掲示板のほうに飛んだ。

掲示板にはいくつかの依頼が掲示されていた。カズラは困っている人が多いことに少々驚いていた。
「何か金になるような依頼がいいなぁ」カズラはつぶやいた。
「バカか。ロシュ世界のこと何も知らないくせに。そんな簡単に金になるような依頼があるか」
「あのなあ、バカって言うのをやめろよ。その一言で傷つくやつだっているんだぞ」
「ハァ？何言ってるんだ。俺がバカって言うのはそいつが何の考えもなしにバカなことしたり言ったりするからだ。
バカって言って当然だろう。黙ってたら本人が気づかないし、そ

いつがかわいそうだろう。
　それに傷つくってことは何故そんなこと言われたか考えずに言葉だけを捉えていて自分に対して甘えてるんじゃないのか？」
「わかったわかった。だがもうちょっと言い方を変えて優しく言ったっていいだろう」
「それは仕方がない。つい言ってしまうからな。今さら変えられん」
「・・・・・・」
仕方ないで終わらせることに何か怒りを感じたが、本人に変える意思がないのはどうしようもないとあきらめた。
「じゃあお前が見て俺に合ってる依頼ってのを教えてくれないか？なんせ何も知らないからな」
「ふむ、これなんかどうだ？」
「なんだ？」カズラは掲示板を見た。
”カティーヌ村にときどき現れる怪物を倒してください。　カティーヌ村フリッカ　ＰＳ．お礼は要相談”
「ぶっ！？怪物って俺に退治できるわけないじゃないか。無理無理無理」
「バカか。いいか？こんな町の掲示板に依頼を載せてるってことはたいした怪物じゃないってことだ。
　手ごわい怪物なら教会や直接騎士団に頼みに行っている。この依頼状も大人じゃない子供の字だ。
　子供のいたずらの可能性もある」
「そうか、なるほど・・・」何も知らないと思って威張りやがって、いつかとっちめてやる。
「じゃあこの依頼にしよう。その、、、カティーヌ村に行く前に腹ごしらえしたいんだが・・・」
「なんだ腹減ってるのか？しょうがねぇなぁ」
レストランの中で食事を取りながらカズラはハティに聞いた。
「お前アスナを知ってるみたいだけど、あいつともこんな風に一緒

だったのか？」
「一緒だった。と言いたいがちょっと違うな」
「どういうことだ？」
「アスナ様にはペットがいたんだ、そのペットが俺の兄貴だった。
兄貴は優秀で、いろんなとこでアスナ様を助けていた。俺もペットとして仕えていたんだが呼び出されるのは兄貴だけで
結局アスナ様が願い事を叶えるまで俺様は呼び出されることはなかった」
「仕えていたってことはアスナに見初められてついていくことになったんじゃないのか？」
「うーん、見初められたのは兄貴で、俺はそばにいたからついでって感じだったな」
「ペットだったってことは、今みたいにアイテムじゃなかったのか？」
「ああそうだ。まだ今持ってる能力は無かった」
「へぇ～、なんでペットからアイテムに変わったんだ？」
「アスナ様が願いを叶えた最初の者として報酬が別にあったんだ。それがロシュ世界内の願いを叶えることができるという
アイテムだった。本当は石だったんだが、俺をそのアイテムにしてくれとデモクリトス様にお願いしてアイテムになったんだ」
「そこまでしてアスナに仕えたかったのか」
「アスナ様は頭のいい方でなあ。ちょっと意地悪なとこもあったけど・・・弱いものには優しくて、相手がどれだけ強い奴でも
悪い奴にも正々堂々向かって行く勇気を持っていた」
「ふ～ん。そっか」
「アスナ様のようになれとは言わないがお前も頑張れば近づけるかもな」
「・・・・・・・・」（そんなに頑張ろうとは思ってないんだけどな・・・ハーシェルさえ見つかれば）
「腹いっぱいになったならカティーヌ村に行こう」

「ちょっと待て。ここの食事代どうするんだ？俺は金なんて持ってないぞ」
「袋の中に小さい袋入ってなかったか？その中にある程度の金は入っているだろ」
「なに？聞いてないぞ」
「カロンが言い忘れたんじゃないか？あいつおっちょこちょいなとこあるからな」
「そういえばお前のことしか聞いてないぞ」
「なんだと！？ロシュ世界のシステム何も教えてないのか？カロン一体何やってるんだか・・・俺の説明だけでいっぱいいっぱいになりやがったな」
「お前が教えてくれるのか？」
「しょうがねぇなあ、道々教えてやる。あとレストランの代金は入るときに勝手に袋から抜かれてるぞ」
「そうなのか！？」
「だからやたらめったら色んなトコに入ってると金なんてすぐなくなるぞ」
「わかった気をつける」
「それじゃ行こう」

第8話：　CATINE～カティーヌ村～

レストランから出たところでカズラはハティに聞いた。
「ところで、この世界には俺みたいな罪人じゃない普通の人がたくさんいるんだろ。それらしい人を俺には見分けがつかないんだけど
どこにいるんだ？」
「ん～この村にはいないみたいだな。昔は大勢いたんだが、今は新しく入ってくる人は珍しいからな」
「そうか」（ハーシェルについて聞きたいと思っていたが仕方がない）
「それに、お前がいるしな」
「どういう意味だ？」
「お前が罪人だから近づく人がいないんだ」
「なんで他の人が罪人だってこと知ってるんだ？！」
「さっきの掲示板のところで、この世界にいるあらゆる人物の検索をすることができる。お前は罪人ってことで警戒されている。
しかも”アスナの従者”って肩書きまでついてる」
「なんだそれは？いつ俺があいつの従者なんかになった！」
「俺に聞くな。デモクリトス様がつけたんだ。あのアスナ様の従者ってことでお前は他の奴らから注目されてることは確かだ。
おそらく現実世界でもちょっとした話題になってるだろう」
「なんてこった・・・」
「ところで、カティーヌ村に行くには北へ向かう道を進むことになる。けっこう獣が襲ってくるから注意しろよ」
「ナニ！？注意しろってどう注意するんだ」
「やられないように、襲われる前に剣で追い払うか倒せ。カティーヌ村で怪物退治する予行演習だと思ってな」
「怪物退治は子供のいたずらだってさっき・・・」
「バカ！いたずらかもしれないって言っただけでそうとは決まって

ない！！本当に手ごわい奴かもしれん！！
だから予行演習だ。だが自身を持て、お前の大剣の扱いはなかなかだったぞ。道に出てくる獣は数匹やったところで
お前を襲ってこなくなるだろう」
「わかった」
カズラは剣の柄を強く握り締めながら北の道へと向かった。

。。。。数時間後
「カティーヌ村が見えてきたな。ほらあそこだ」ハティはカズラの頭の上に乗って言った。
「あ、あのなあ・・・・」カズラはぐったりして息を切らしていた。
「お前、プルト町で獣を数匹退治したら襲ってこなくなるって言わなかったか？ず～～～っと追い掛け回されっぱなしで
襲われまくりだぞ！！」
「ふむ、そういうこともある」
「・・・・・・」カズラは疲れで怒る気も失せていた。
「もうすぐだからもうちょっとガンバレ！！」ハティはあいかわらず頭の上で呑気に声をかけていた。
そのとき、大きな狼のようなトラのような獣が背後からものすごいスピードで襲ってきた。
カズラは素早く大剣を手に取り振り回したが獣は軽くかわし横からカズラに向かって飛んだ。
大剣に引っ張られるようにカズラは上に跳ね上がった。
落下する勢いで獣に大剣を突き刺すと、獣は動かなくなった。
「やれやれ一体何匹襲ってくるんだ、こいつら。さっさと行くぞハティ」
カズラはそう言うと走った。ハティは追いかけるように後をついていった。
その様子を林の中から見ているものがいたが、カズラとハティは気づいていなかった。

「つ、着いた～～～、ちょっと休憩」カズラはそう言うとカティーヌ村の入り口の門に入ったところで座り込んでしまった。
「おい、そんな暇ないぞ。すぐにフリッカって奴を探すぞ」
「ちょっと待て。ふらふらなんだ。お前が探してきてくれ」
「わかった。そこで待ってろ」
ハティは村の中へと飛び立っていった。
「あれ？あいつ文句の一つも言わず行ってしまった。なんだか嫌な予感がする・・・」
カズラは立ち上がり村の中を見た。そこにはたくさんの犬が行き来していた。
「なんだ、この村は・・・」
カズラが呆然としていると声をかけてくるものがいた。
「カズラさん、こっちで休憩しませんか？」
声がする方へ振り向くと、横のカフェっぽい店の中からだった。金はまだあるだろうとその店へ入ることにした。
「いらっしゃいませ」
カズラは疲れた様子でテーブル横のイスに座ると店員に「水くれ」と注文した。
「はい、どうぞ」
「ありがとう」
と店員を見ると一匹の大きな犬が立っていた。
カズラは驚き見渡すと店内のイスにはすべて犬が座っていた。
「うわっ！？」思わず大きな声を出してしまった。
店内の犬が全員カズラの方を向いて興味深そうに見ていた。
カズラは水を一気飲みすると店の外に走って逃げていた。
「おーーい、見つけたぞ～」
ハティが大声を出してカズラに近づいてきた。
カズラはハティに向かって口をパクパクさせてカフェを指さした。
「なんだ？喫茶店が珍しいのか？」

「い、いや、犬がいっぱい」
「当たり前だろ！ここは犬の村だからな」
「なんだ？犬の村！？しゃ、しゃべるのはお前がしゃべってるから驚かなかったが大きいのとか小さいのとかいっぱい
いたぞ？」
「バカ！！だから犬の村だって言ってるだろ！！犬がいなかったら犬の村なんて言わないだろうが」
「・・・・・」（納得したようなしないような・・・ロシュ世界ってのはわけわからん）
「それより、フリッカのとこに行くぞ」
「おう」
カズラは無理矢理自分を納得させて依頼主に会うことにした。
「ということは、フリッカさんも犬なのか？」
「そうだ。しかも子供じゃなかった。依頼内容の説明はお前を連れて行ってからってことにしてもらった」
「じゃあお前の予測は外れってことか。残念だったな」
「ああ」ハティはそれだけ言うとさっさと先に行った。
（あれ？またか。文句でも言ってくるかと思ったが・・・これは依頼が相当厳しいのか？）
カズラは少し不安を抱いていたがカティーヌ村に向かう道で何匹かの獣を倒したことで自信をつけていた。

第9話：　CAVE～洞窟～

カズラとハティはフリッカの家の前に来た。
犬小屋を想像していたカズラだが、人間と同じような生活をしているためそんなはずはなく普通の家だった。
「フリッカ！！つれてきたぞー」いきなりハティが叫んだ。
「叫ばなくても呼び鈴くらいあるだろ。しかもこんな普通の家なのによくあの短時間で見つけたな」
「おう、地図にここの家がマークしてあった」
「なに？そんな機能がるのか？」
「ああ、言ってなかったか？便利だぞ」
カズラはハティをぶん殴ろうとコブシを固めたとき、家のドアが開いて犬がでてきた。
「いらっしゃい」
カズラはペコリとお辞儀した。
「どうぞ入ってください。お話は中でしましょう」
カズラとハティは遠慮なくズカズカと中に入った。
「怪物を倒してくださいって張り紙をプルト町で見て来たのですが」
「はい、お願いしたのは私です。カティーヌ村の地下にときどき出るんです。
　カティーヌ村の地下は洞窟になっているんです。普段凶暴な怪物は出ないんですが
　最近洞窟の中で暴れまわっている怪物が現れました」
「洞窟には何か重要なものが置いてあるんですか？」
「いえ、特に重要なものはありません」
「それなら放っておいても・・・」
「ですが、いつか洞窟から出てきて村を襲うのではないかと村人は恐れていまして、、、」
「なるほど。誰かその怪物を見ているんですか？」

「はい。私の子供なんですがどうも探検と称して洞窟に入ったときに見たようです」
「スコル！スコル！ちょっと来なさい」
「はーい」
小さい犬が部屋に入ってきた。
「スコル、この方達に洞窟の怪物について説明しなさい」
「え～～百聞は一見にしかずって言うくらいだから実際に見に行こうよ」
スコルはトコトコと外へ歩いていってしまった。
「おい、スコル！！すみませんワガママに育ったみたいでして」
「いえ、あの子の言うとおりでしょう。実際に見たほうが早い。ちょっと行ってきます」
カズラはスコルを追いかけて外へ出た。
「スコル、洞窟まで案内してくれ」「ＯＫ！」スコルは勇ましそうに先を歩いた。

村から少し離れたところに洞窟の入り口があった。
「ここが入り口」スコルはカズラに説明した。
「怪物以外はそんなに恐くないんだけど中はちょっと入り組んでて迷路になってるよ」
「そうか、地図なんてあるのか？」
「そんなものないよ、入る人は滅多にいないしね。案内しようか？」
「いや、危険だからここまでいいよ」
「だいじょうぶ、だいじょうぶ」
スコルは怖じ気づく様子もなくさっさと中に入っていった。
「おい！！、、、、なんて奴だ」
「カズラ、俺はこの中では役に立たない」ハティは不安そうにそう言った。
「まあ何か怪しいトコあったら教えてくれ」
「いや、真っ暗だから何も見えない」

「そうか！しょうがないさ。気配か何か危なかったら言ってくれ」
カズラはスコルを追った。

第１０話：　ＭＯＮＳＴＥＲ～怪物～

「うわ、ホント真っ暗だな、スコル？どこにいる？」
「目の前にいるよ。見えないの？」
「カズラ、袋の小さなポケットに丸いアイテムがあるはずだ。それを服に貼れば数ｍだが周囲が明るくなるはずだ」
「わかった」
カズラは袋をさぐり丸いアイテムを取り出し服に貼り付けた。するとぼんやりと周りが見えるようになった。
洞窟はそれなりに広かったがずいぶん奥まで続いているようだ。しかも横穴が数多くあるように見える。
「けっこう奥は深そうだな・・・」
「そうだね。でも何とかなるよ。怪物はこっちで見たよ」
スコルは駆けるように先を急いだ。
「おい、もうちょっと慎重に行ってくれ。横穴から怪物が出てきたらどうするんだ？」
「だいじょうぶ、ここらへんじゃ怪物の臭いしないから」
「そうか、だがついて行くのが大変だから、もうちょっとゆっくり行ってくれ」
「しょうがないなあ、わかったよ」
カズラ達はゆっくりと奥へ向かった。

階段を下ったり横穴に入ったりと３０分くらい歩いただろうかというとき、スコルが立ち止まった。
「怪物の臭いがする」
「なに！？」
カズラは剣を構えじりじりと前に進んだ。
そのとき、ガァー！という咆哮とも叫び声とも思えないような音が聞こえた。

「うわっ」
「カズラ、上だ！！」
ハティが叫ぶと同時に天井から怪物が落ちてきた。
怪物は地響きをたてたかと思うと素早く体制を建て直しスコルに襲い掛かった。
カズラは剣を振りスコルと怪物の間に入って守ろうとしたが怪物に払われ体を壁におもいきりぶつけた。
「ぐっ、スコル逃げろ！」叫んだがスコルは恐怖で動けないようだった。
「この野郎、こっちだ！！」怪物の横っ腹を大剣で叩き切ろうと薙ぎ払ったが硬くて弾き返された。
するとカズラの方を向き飛び掛ってきた。
カズラは後ろに反転して顔のあたりに向けて大剣を突き刺した。
怪物は断末魔の咆哮をあげると横たわり動かなくなった。
「ふ～意外とあっさり片付いたな、スコルだいじょうぶか？」
スコルはまだ恐怖が続いているのか少し震えていた。
「大丈夫か？」カズラはスコルを抱いて体を撫でてやった。
「あ、ありがとう。もう大丈夫・・」スコルは気丈にそう言ったが震えは止まっていなかった。
「お前が見た怪物ってのはこいつのことか？」
「うん」
「そうか、じゃ依頼終了ってことかな？ハティ」
「ああ、そうだな。フリッカへ報告に戻ろう」
「ちょっと待って。奥のほうから何か音がしない？」スコルは聞き耳を立てていた。
「なに？ハティ、何か聞こえるか？」
「いや、俺には聞こえない」
「どうするかな・・・・」
「確かに何か聞こえる。でもさっきの怪物のような咆哮じゃないみたいだけど・・・」

「まあいいさ、もう怪物は出ないだろうし奥に行ってみよう」
さらにカズラ達一行は奥へ進んだ。
「あの奥何か光ってる！！」スコルは叫び、駆けて行った。
「オイ気をつけろ！何がいるか分からないんだぞ！！」
カズラは無鉄砲なスコルに少し呆れながら後を追った。

光が漏れていた場所に来ると、そこは部屋になっていて何本かのロウソクが灯されていた。
部屋はいくつもあるようで、カーンカーンという何かを打っている音が奥の部屋からしていた。
「もしかしたら別の怪物かもしれない。気をつけろ！」
カズラは慎重に奥の部屋に向かった。
「誰だ！？」
奥の部屋から声がした。怪物ではないようでカズラは安堵した。
「あれ？ハーじいちゃん？」
「なんだスコル知り合いか？」
「うん」
「ハーじいちゃん、怪物退治に来たんだ」
「ナニ！？」
奥の部屋から老人が出てきた。
「おうスコル！お前が怪物退治に来たのか？」
「ううん、さっきこのカズラが怪物を退治したんだ」
「何！？退治したのか？」
スコルはペコリとお辞儀した。
「カズラさんありがとう。ワシはここで鉱物の研究をしておったのだが帰ろうとしたら
突然怪物が道を塞いでしまっての。どうしようかと考えていたんじゃがここまでは怪物も
襲ってこなかったもんで研究を続けておったんじゃ」老人は笑いながら説明した。

「そうですか、なら先ほど怪物は倒しましたから帰りましょう」
「あの怪物を倒すとは大したものだ。ちょっと待ってくれ。道具を持ってくる」
老人はそう言うと奥の部屋へ行き大きな袋を持ってきた。
一行は来た道をスコルに案内してもらいながら洞窟を戻った。
フリッカの家の近くまで来たとき、門の前でフリッカが心配そうに待っていた。
カズラ達の姿を確認すると安心したように笑顔で手を振っていた。
「おかえりなさい。怪物は退治できましたか？」
「うん。すごかったよ。危なかったけどカズラが助けてくれた」
スコルは嬉しそうにフリッカに答えた。
「なに？お前はまた無鉄砲なことしたんじゃないだろうな？
申し訳ありません。こいつが色々とご迷惑かけたようで」
フリッカはカズラに頭をさげると後ろの老人を見て驚いた。
「ハーシェルさん！？」
「え！？ハーシェル！？」
カズラも後ろを振り向いて老人の顔を見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4005d/

陽に輝く未来を夢見て

2010年10月10日05時03分発行